

幼児・児童期に経験したお菓子の自伝的記憶

坪井 寿子

Study of the autobiographical memory of confectionery that episodes experienced
in preschool and elementary school children

Hisako Tsuboi

要旨

本研究は幼児・児童期に経験したお菓子の自伝的記憶（現在の自分自身に影響を与える過去の経験の記憶）について検討したものである。大学生を対象に幼児期もしくは児童期に経験したお菓子に関する最も印象に残るエピソードを想起してもらった。お菓子の内容（和菓子、洋菓子、スナック菓子、一口サイズ菓子）ごとに調べた結果、幼児期に経験した場合には和菓子に関するエピソードが多く、児童期に経験した場合にはスナック菓子に関するエピソードが多いことが示された。さらには洋菓子に関するエピソードについては女性が多いことの結果も示された。

キーワード

お菓子、自伝的記憶、幼児期、児童期、感情

1. 問題

(1) はじめに

私たちはお菓子にまつわる様々なできごとを経験している。下記の文はその一例といえる。

「お菓子には、ひとつひとつに思い出が宿っている。遠足の前に300円で何を買おうか、売り場で長時間悩んだあの日。初めてもらったお小遣いを握りしめて買いに行ったフーセンガム。スーパーで泣きながらねだった、おもちゃ付きのキャラメル、好きな人が毎日のように食べていたガムをマネして買ったこと。近所のおばちゃんにもらったフルーツのキャンディ。おやつに出てくるとちょっと嬉しかった高級なチョコケーキ……。幼かった私は、そんな大好きなお菓子たちとともに大人になった。今でも新しいお菓子や憧れのお菓子を口にするとき

はワクワク胸が高鳴るし、お気に入りのロングセラーには安心感を覚える。この感覚は今も昔も変わらない。」(松林 2017 p.2 より引用(改行は省略))。

少し長い引用であったが、幼少期のお菓子にまつわる経験がさまざまな影響をもたらすことがうかがえる。本研究では、このことについて、記憶の心理学、特に自伝的記憶から検討していく。自伝的記憶とは現在の自分自身に影響を与える過去の経験に関する記憶を指す。お菓子にまつわる出来事も懐かしさの他にさまざまな意義・役割を有していると考えることができる。

(2) 子どもにとってのお菓子の意義

子どもにとってお菓子には単なる食べ物以上の役割・意義があることについていくつかの例を挙げていく。

例えば、全日本菓子協会からの「お菓子ナビ .com」ではお菓子憲章として、①お菓子が楽しさや夢を広げ、豊かな食文化を創造すること、②お菓子が生活においしさ、やすらぎ、団らんを提供すること、③お菓子が心と体の元気を育てること、の3点が挙げられている。さらにお菓子の食べ方や四季おりおりの行事とお菓子との関連についての情報提供や多種多様なお菓子に関する知識を分かりやすく紹介するなど親子ともに楽しめる案内が掲載されている。

また、具体的な製菓企業でもいくつか参考になる資料がみられる。例えば、森永製菓に関しては、次のようなホームページ資料がみられる（最終アクセス2018年3月）。この森永製菓の菓子育では、子どもたちのすこやかな成長を応援するためにお菓子を通して心とからだの栄養を提供する旨の記載があり、そのうえで、「お菓子には栄養を補うだけではなく、もっと大切な価値があると考えています。みなさんの心に残るエピソードの中に、お菓子があった記憶はありませんか？ 誰かを想ったあたたかい気持ちを伝える手紙のような存在… いつもそばにいて、幸せを運んでくれるエンゼルのような存在… 森永製菓は「菓子育」の活動を通して、お菓子のこのような価値を広めていきます。」のメッセージが述べられている。

さらに、「おいしく」「たのしく」「すこやかに」のキャッチフレーズとともに様々な企画が示されている。このうち、「すこやか」については、「お菓子と虫歯の関係」「子どものおやつと肥満」「おやつの適量と時間」「おやつとしつけ」などの情報が掲載されている。この「お菓子としつけ」では、お菓子の魅力を活用しながら「食前の手洗い」「いただきます・ごちそうさま」「歯磨き」などの基本的なしつけを行うことが案内されている。これらは、保育教育場面での食育としての意味づけもあると考えられる。

(3) お菓子の種類ごとの検討

お菓子の意義・役割について述べたが、お菓子と言ってもさまざまなものがあり、まとめてとらえる

ことは難しい。そこで、本研究では子どものお菓子にかかわる経験という面から、和菓子、洋菓子、スナック菓子、一口サイズ菓子に分けて考えていくことにした。お菓子全体の中でそれぞれがどのような位置づけや特徴があるのかを簡単に述べていく。

和菓子については、伝統的な昔ながらのお菓子とされており、おやつとして食べるだけでなく、儀式や行事にも使われることも少なくない。また、子どもに分かりやすく和菓子の魅力が紹介されている絵本もある（平野 2010）。このような和菓子は素材も含めて歴史・文化の面で蓄積があるので、その栄養面でも優れているといえる。さらに、このような和菓子は、懐かしさの感情が生じるが、子どもの食へのかかわりということからも考えることができる。最近ではこのような和菓子を保育場面に取り入れる試みもなされている（例えば、水野・山内（2000））。

洋菓子についてもさまざまなものがある。ビスケットやクッキーなどは普段のおやつで食べるものである。それに対しケーキ類は子どもにとって多少特別な意味をもつ存在でもある。ただカップケーキのように両者の中間のようなものもあり、明確には区別できない。かつては洋菓子というだけでおしゃれな高級感のあるイメージがあったが、現在では大分身近になっている。同じ幼少期のお菓子でも時代背景があることが示されているといえる。また、洋菓子もクリスマスの行事や最近ではハロウィンの行事などで利用されている。

スナック菓子については、いわゆる駄菓子の観点からみていくことができる。駄菓子は子ども達に非常に身近な存在で親しまれている。ただ、背景事情もあり、栄養的には十分に配慮されていない状況もある。それでも、遊びが伴った友達との懐かしい経験もある。このように、お菓子にまつわる楽しいエピソードを保ちつつ、栄養その他の食の問題とも両立させながら、子どものお菓子にまつわる豊かな経験を蓄積していくことなどはスナック菓子の意義・役割を考えていく上で必要なことになってこよう。

一口サイズ菓子については、飴やチョコ菓子など

が代表的なものである。についてはいわゆる一口菓子に位置づけられるものである。「食べる」というよりも「つまむ」といった印象を持つものもある。そのためもあり、手軽で比較的安価なものが多いといえる。ただ、スナック菓子との区別や、チョコの場合は洋菓子との区別が難しい場合もある。この場合、一口菓子としての位置づけがあって独立したおやつとして食べるだけでなく、遠くに出かける際の乗り物などのちょっとしたときに食べるものとしての意味合いもある。小さい分、他者とのやりとりが頻繁に行われた経験も少なくないだろう。

(4) 自伝的記憶からの検討

次に自伝的記憶から検討していくが、これまでもお菓子と自伝的記憶についていくつか取り上げてきた（坪井 2014、2015、2016 Tsuboi. 2016 a, b）。これらには大きく分けると感覚・知覚的側面と社会・文化的側面（食育なども含む）からの検討が可能である。さらに感情の問題も関連してくるので、多様な面からの検討が必要になってくる。

例えば、冒頭に紹介した文で示されたような懐かしさとの関連については、自伝的記憶と懐かしさを直接検討したものに瀧川・仲（2011）の研究がある。そこでは、大学生を対象に小学校及び中学校時代の懐かしい音楽を聴いた場合の自伝的記憶の想起について調べている。その結果、自伝的記憶が数年の幅を持つ人生の時期によって時間的に体制化されていることが示されている。音楽については、メロディが頭の中に浮かぶなど鮮明な懐かしさが独特の形で生じることが示されているが、お菓子についてはどのような傾向が見られるのか、お菓子の特徴を踏まえて考えていく必要が示されている。

次に、私たちはなぜ過去の経験を振り返るのかという自伝的記憶の機能の面から考えていく。自伝的記憶の機能には、自己機能、社会機能、方向づけ機能の3つがあるが、これを基に、お菓子を食べた出来事の記憶を思い出すことにはどのような意味があるのかについて述べていく。

まず、自己機能については、自伝的記憶が自己の

連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像を維持するのに役立つという機能を指している。お菓子は非常に身近なものであり、人生に大きな影響を与えることはあまりないかもしれないが、懐かしさを強く感じ、それが支えになってくる場合もあるかもしれない。このように、過去と現在の自分をつなげる連続性にかかわってくるのではないかと考えられる。

2つめの社会機能については、エピソードは共有した他者と想起する場合もある。懐かしさを共有するだけでなく、実際に親密性も高くなると考えられる。例えば、飯塚（2014、2015）では一人食と共食の自伝的記憶について検討している。お菓子については坪井（2016）でも検討している。

3つめの方向づけ機能については、自伝的記憶がさまざまな判断や行動を方向づけるのに役に立つという機能を指している。お菓子に関する個食や偏食などの食生活、さらには食の安全の問題も含めるとこの方向づけ機能がかかわってくる。子どもの頃のお菓子にまつわる経験に対する成人した後の影響については、身近な大人としてのかかわりである場合もあれば、保育教育職や製菓関連職などのように職業に携わる者としてかかわる場合もある。特に、後者の職業としてかかわる場合には、自身の個人的な経験に頼りすぎることに対しては自省していかなくてはならないが、実際には自身の印象的な出来事は生の経験としての影響力がかなり大きいといえる。

(5) 本研究の目的

以上により、本研究では、幼児・児童期の経験したお菓子の自伝的記憶について、和菓子、洋菓子、スナック菓子、一口サイズ菓子のお菓子の種類ごとに検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象者

調査対象者は、大学生 259 名である。このうち、幼児期に経験したエピソードを想起してもらった対象者は大学生 133 名（男性 44 名・女性 89 名、平均年齢は 18.87 歳（ $SD = 0.72$ 歳））である。児童期

に経験したエピソードを想起してもらった対象者は大学生 126 名（男性 45 名・女性 81 名、平均年齢は 20.21 歳（ $SD=1.13$ 歳））である。

(2) 質問項目

調査対象者には、幼児期もしくは児童期に経験したお菓子に関する出来事の中で、最も印象に残るエピソードを挙げてもらい、そのエピソードについてのお菓子の種類（和菓子、洋菓子、スナック菓子、一口サイズ菓子）、時期（学年）、さらに印象評定ならびに感情状態について回答してもらった。エピソードの印象評定については、鮮明度、重要度、頻度、当時の気持ち、現在の気持ち（よい気持ちか否か）の 5 種について 7 段階尺度で尋ねた。併せて、お菓子の種類、誰と食べた出来事か（もしくは 1 人で食べた出来事か）についても尋ねた。

一方、感情状態については、多面的感情状態尺度（寺崎・岸本・古賀 1992）を用いた。これは、40 の感情語について 4 件法で尋ねているものであり、心配、敵意、倦怠、快活、穏和、親和、慎重、驚きの 8 因子からなっている。なお因子名については本研究のテーマであるお菓子の内容に併せ若干変更してあるが、質問項目として使用した特性語はそのまま使用している（坪井（2016）では元々の名称で検討している）。実際の語は以下のとおりである。「心配因子」では「くよくよした、気がかりな、自信がない、悩んでいる、不安な」の 5 語、「敵意因子」では「うらんだ、むっとした、攻撃的な、憎らしい、敵意のある」の 5 語、「倦怠因子」では「だるい、つまらない、退屈な、疲れた、無気力な」の 5 語（以上ネガティブ傾向のある 3 つの因子）、「快活因子」では「はつらつとした、活気のある、気力に満ちた、元気いっぱい、陽気な」の 5 語、「穏和因子」では「おっとりした、のどかな、のんきな、のんびりした、ゆっくりした」の 5 語、「親和因子」では「すてきな、恋しい、好きな、いとおしい、愛らしい」の 5 語（以上ポジティブ傾向のある 3 つの因子）、「慎重因子」では「ていねいな、思慮深い、慎重な、注意深い、丁寧な」の 5 語、「驚き因子」では「ぴく

りとした、動揺した、びっくりした、はっとした、驚いた」の 5 語、（以上、ニュートラル（先行研究では「覚醒」）傾向のある 2 つ）の因子）を用いた。

(3) 手続き

質問紙調査の形式を用いて集団施行で行った。

3. 結果と考察

(1) エピソード時期の分布

まず、幼児期内のどの時期でのエピソードかについては、年少クラス時のものが 28 名、年中クラス時のものが 37 名、年長クラス時のものが 68 名であった。年少の時期が少ないのはあまり覚えていないことによると考えられる（図 1）。

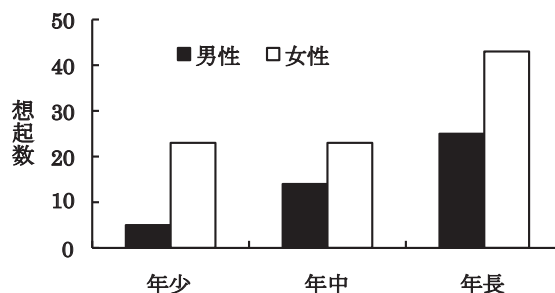


図 1 幼児期における想起時期の分布

一方、同様に児童期内のどの時期でのエピソードかについては、1 年生時のものが 18 名、2 年生時のものが 13 名、3 年生時のものが 26 名、4 年生時のものが 16 名、5 年生時のものが 19 名、6 年生時のものが 34 名であった。6 年生時の想起エピソードが多かったのはより年長の時期考えられる。また、3 年生時のエピソードが多かったことについては、小学校生活に慣れかつ中学（思春期）に向けての悩みもなく、小学校時代を謳歌したようなエピソードが伴っていたと考えることができるが、詳細については更に検討していく必要がある（図 2）。

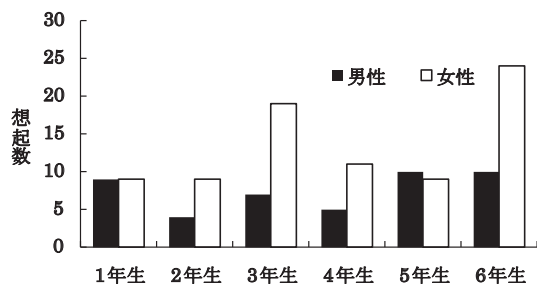


図2 児童期における想起時期の分布

(2) エピソードの想起時ごとの特徴

次に、エピソード想起時ごとにお菓子の内容（種類）について調べた（図3）。幼児期のエピソードを想起した場合のお菓子の種類の内訳については、和菓子類24名、洋菓子類35名、スナック菓子類27名、一口サイズ菓子類32名、その他15名であった。他方、児童期のエピソードを想起した場合のお菓子の種類の内訳については、和菓子類5名、洋菓子類24名、スナック菓子類61名、一口サイズ菓子類25名、その他11名であった。両者を比較したところ、エピソードが幼児期の場合には、児童期のそれと比べ和菓子類が多かったことが言える。これは後述するように家族と一緒に食べたエピソードが多かったことと関連して考えることができる。一方、エピソードが児童期の場合には、スナック菓子が比較的多かったことが特徴的であり、これは、友達と一緒にスナック菓子を食べたエピソードが多かったことによると考えられる。自由記述の例としては、ホットケーキ、すいとん、カップ麺やぶた麺、焼き芋、するめ、赤ちゃん用せんべいなどがみられた。

(3) 男女差について

各エピソードで挙げられたお菓子の男女差については、洋菓子は女性の場合に多く、スナック菓子は男性に比較的多くみられた（図4）。調査対象者数に偏りがみられるので、それぞれの割合についてはさらに検討していく必要がある。

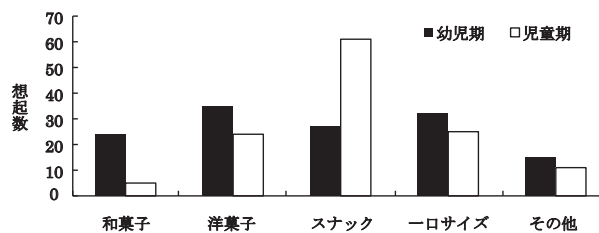


図3 お菓子の種類とエピソードの生起時期

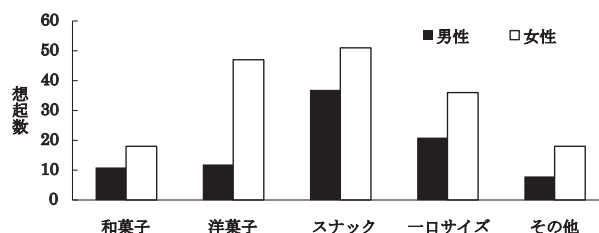


図4 お菓子の種類と男女差

(4) エピソードの評定値

想起された各エピソードに対し、どのような印象を持っているのかについていくつか評定を求めた。幼児期のエピソードについては、エピソードの各評定値の平均は、鮮明度は4.0、重要度は3.9、頻度は3.5、当時の気持ちは4.9、現在の気持ちは4.7であり、児童期のエピソードについては、鮮明度は4.2、重要度は3.6、頻度は2.8、当時の気持ちは4.9、現在の気持ちは4.8であった（図5）。頻度において幼児期のエピソードの方がよく思い出されることが示された。幼児期のエピソードの方が昔の出来事で情報としてもより曖昧ではあるが、その分印象に残っている出来事が想起された結果かもしれない。一方、エピソード評定値の男女差については、それほど顕著な差は見られなかった。

一方、お菓子の種類におけるエピソード評定については、当時や現在の気持ちとしては洋菓子の評定値が高かったが、高級感も影響しているかもしれない。また、スナック菓子や一口菓子の鮮明度や重要度がやや高かったのは、お菓子の内容だけでなくその時の出来事の影響も関連しているかもしれない。

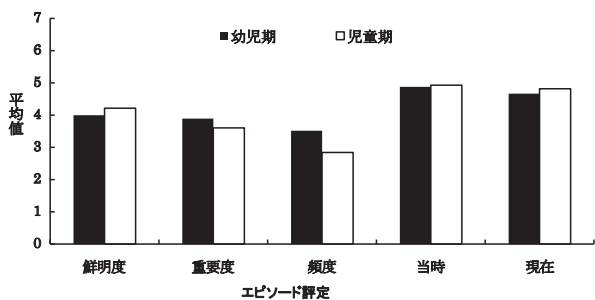


図5 エピソード生起時期別の印象評定

表1 お菓子の種類ごとのエピソード評定

	鮮明	重要	頻度	当時	現在
和菓子 n = 29	3.69 (1.37)	3.45 (1.09)	3.17 (1.51)	4.31 (1.23)	4.34 (0.81)
洋菓子 n = 59	3.93 (1.67)	3.64 (1.34)	3.14 (1.62)	5.14 (1.59)	4.83 (1.30)
スナック n = 88	4.10 (1.49)	3.77 (1.49)	3.15 (1.62)	4.89 (1.59)	4.72 (1.36)
一口サイズ n = 57	4.19 (1.65)	3.74 (1.73)	3.09 (1.54)	4.96 (1.59)	4.84 (1.32)
その他 n = 26	4.77 (1.50)	4.31 (1.57)	3.69 (1.57)	4.96 (1.75)	4.85 (1.46)

注) 数値は平均値、() 内は標準偏差

(5) 特徴的なエピソード

特徴的なエピソードとして、まず、幼児期のエピソードについては、「病院の帰りに公園でアポロのチョコを食べた。アリにも分けてあげて、その後叱られた。」「幼稚園で皆で作ったお団子を5人グループで食べた。座る場所について1人の女の子とケンカして、先生に席を決められた。」「4歳の時に風船ガムが好きでよく食べていて、ふくらまして妹の髪の毛にくっつけてしまい、ガム禁止になった。」「小さい頃はお菓子を食べるのが禁止されていたので、いつもおやつはフルーツだった。いちごをたくさん食べたのを覚えている。」「怒られているのに、お菓子を隠しながら食べていたので、お母さんも呆れて笑っていた (気がする)。」などがみられた。

児童期のエピソードについては、「友達の家の前ベンチで、グレープ味の30cm位のチューイングガムを友達と食べた。」「遠足で、ひもQを友達に少しずつ分けていたら、自分のお菓子がなくなった

こと」、「友達から貰った、その頃初めて食べた味のアイスが美味しくなくて、気まづくなった。(カップアイス)」などがみられた。

以上をまとめると、幼児期のエピソードでは家族と一緒に食べたあるいは保育園でのおやつを食べたエピソードが見られ、児童期については友達と一緒に遊んだ時のエピソードが多く見られた。

(6) お菓子を食べた対人的状況

エピソードが幼児期の場合には、家族とともに食べたというエピソードが多く、エピソードが児童期の場合には友達と食べたというエピソードが多く見られたのが特徴である。これらは、それぞれの発達段階における生活環境からもうなずける傾向である。食事場面での対人状況については、飯塚(2014、2015)があり、いわゆる個食の問題についても紹介されているが、お菓子はそれほど深刻ではないと考えられる。

表2 お菓子ごとの対人状況

	1人	誰かと
和菓子	8	21
洋菓子	8	51
スナック	15	73
飴・チョコ	11	46
その他	5	21
合計	47	212

注) 数値は人数

(7) 感情評定

①特性語ごとの感情評定について

和菓子、洋菓子、スナック菓子、一口サイズ菓子ごとの各エピソードに対する特性語ごとの平均を以下に表3に示した(細部の資料なので標準偏差は省略)。数値は1~4の範囲となる。総じて洋菓子の値が高く、続いてスナック菓子の値が高い傾向であることが言えた。

表3 エピソードの時期ごとの感情特性語

	和菓子	洋菓子	スナック	一口サイズ	その他
【心配】					
くよくよした	1.45	1.34	1.43	1.30	1.38
気がかりな	1.62	1.53	1.61	1.53	1.50
自信がない	1.62	1.36	1.45	1.23	1.31
悩んでいる	1.52	1.41	1.50	1.35	1.46
不安な	1.69	1.39	1.38	1.49	1.54
【敵意】					
うらんだ	1.45	1.32	1.48	1.14	1.19
むっとした	1.66	1.34	1.48	1.19	1.35
攻撃的な	1.34	1.31	1.49	1.23	1.35
憎らしい	1.41	1.39	1.47	1.18	1.35
敵意のある	1.41	1.41	1.52	1.23	1.15
【倦怠】					
だるい	1.34	1.36	1.47	1.25	1.42
つまらない	1.55	1.46	1.49	1.30	1.19
退屈な	1.79	1.44	1.49	1.28	1.31
疲れた	1.62	1.47	1.55	1.49	1.58
無気力な	1.83	1.37	1.59	1.21	1.69
【快活】					
はつらつとした	1.62	2.15	2.11	1.88	1.81
活気のある	2.17	2.58	2.53	2.49	2.54
気力に満ちた	1.83	2.12	2.02	1.75	2.00
元気いっぱい	2.28	2.56	2.74	2.79	2.77
陽気な	2.31	2.83	2.72	2.46	2.77
【穏和】					
おっとりした	2.48	2.22	2.26	2.09	2.42
のどかな	2.72	2.47	2.41	2.33	2.77
のんきな	2.52	2.24	2.49	2.19	2.38
のんびりした	2.79	2.44	2.73	2.35	2.73
ゆっくりした	2.86	2.58	2.56	2.39	2.88
【親和】					
いとおいしい	1.93	2.46	1.89	2.02	2.42
すてきな	2.34	2.78	2.47	2.44	2.69
愛らしい	1.76	2.29	2.13	2.07	2.35
好きな	2.62	3.00	2.94	2.74	3.00
恋しい	1.72	2.15	1.75	1.81	1.96
【慎重】					
ていねいな	2.10	2.12	1.81	1.84	2.50
思慮深い	1.66	1.64	1.49	1.56	1.77
慎重な	1.62	1.59	1.55	1.70	1.73
注意深い	1.62	1.56	1.49	1.49	1.65
丁寧な	1.76	1.80	1.72	1.47	1.85

【驚き】

はっとした	1.45	1.54	1.63	1.54	1.81
びっくりとした	1.59	1.44	1.51	1.49	1.69
びっくりした	1.90	1.83	1.77	1.77	1.81
驚いた	1.86	1.88	1.67	1.75	1.85
動揺した	1.55	1.39	1.61	1.46	1.65

注) 数値は平均値

②因子ごとの感情評定について

和菓子、洋菓子、スナック菓子、一口サイズ菓子ごとの各エピソードに対する感情評定の因子ごとの平均(及び標準偏差)を以下に示す(表4～表6)。数値は4件法の特徴語の5つの値を総計したもので、5～20の範囲となる。

この結果、「一人でお菓子を食べた」場合は、心配、倦怠、慎重、驚きの因子が高く、一方「誰かとお菓子を食べた」場合については、快活及び親和の因子が高かった。

表4 エピソードの時期ごとの感情(ネガティブ)

	心配	敵意	倦怠
和菓子 n = 29	7.90 (3.56)	7.28 (3.40)	8.14 (3.10)
洋菓子 n = 59	7.02 (2.96)	6.76 (2.96)	7.10 (3.08)
スナック n = 88	7.38 (2.85)	7.43 (3.53)	7.58 (3.25)
一口サイズ n = 57	6.89 (2.86)	5.96 (2.01)	6.53 (2.25)
その他 n = 26	7.19 (2.32)	6.38 (1.98)	7.19 (2.62)

注) 数値は平均値、()内は標準偏差

表5 エピソードの時期ごとの感情(ポジティブ)

	快活	穏和	親和
和菓子 n = 29	10.21 (3.79)	13.38 (4.19)	10.38 (3.63)
洋菓子 n = 59	12.24 (3.71)	11.95 (3.85)	12.68 (3.82)
スナック n = 88	12.13 (4.05)	12.44 (3.88)	11.17 (3.64)
一口サイズ n = 57	11.37 (4.15)	11.35 (4.33)	11.07 (4.60)
その他 n = 26	11.88 (4.68)	13.19 (4.43)	12.42 (4.58)

注) 数値は平均値、()内は標準偏差

表6 エピソードの時期ごとの感情(ニュートラル)

	慎重	驚き
和菓子 n = 29	8.76 (3.88)	8.34 (3.88)
洋菓子 n = 59	8.71 (2.88)	8.08 (3.20)
スナック n = 88	8.05 (2.81)	8.19 (3.49)
一口サイズ n = 57	8.07 (3.14)	8.02 (4.31)
その他 n = 26	9.50 (3.02)	8.81 (3.62)

注) 数値は平均値、()内は標準偏差

③感情評定ごとのエピソードの傾向

先に特徴的なエピソードといくつか紹介したが、それ以外にネガティブ(心配・敵意・倦怠の因子)とポジティブ(快活、穏和、親和の因子)の項目の値が高かったエピソードを紹介する。

まず、ネガティブな値が高かったものは以下の通りである。「ハイチュウにより歯が抜けた。」「初めて黒ゴマせんべいを食べた時、まずかった印象があった。」

「クラスの友達とどこからかのおみやげをクラスで食べた。他のクラスには内緒だと話した。」「うまい棒を食べまくって気持ち悪くなった。」「おやつ時間、食べるのが遅くて1人残されてしまった。」「双子の妹とおやつを半分個した。どっちが多いかでけんかになった。」「保育園のおやつタイムの時に嫌いなレーズン蒸パンを食べさせられた。」「いじめによるやけ食い。」「食べる量でけんか。」「とっても具合が悪かった時に、妹が買ってきた駄菓子をもらって食べた。」

一方、ポジティブな値が高かったものは以下の通りである。「近所の駄菓子屋さんでお菓子を買って、店内で友人と食べた。」「学校で先生にバレないように、友達とお菓子を持ってきて隠れて食べた。」「公園で100円玉を握りしめ、友人たちと焼き芋を買った。」「母がクッキーを作っていて一緒に食べた。」「放課後、手伝いか何かをして、担任の先生がこっそりガムをくれた。」「白くて細いタバコみたいな形

のお菓子でタバコを吸うマネをして友達と遊んだ。」「保育園のお迎えを祖母がしてくれて、働いている母の帰りを待っているときにお菓子を食べた。」「クリスマスパーティでケーキを食べた。」「初めての児童クラブでお菓子を食べた。」「病院の帰りに公園で食べた。アリにも分けてあげて、その後叱られた。(アポロのチョコ)」「兄弟でポテトチップスを食べた。」

全体の数としては、ポジティブ感情の方が多く見られた。また、ネガティブ感情については、お菓子自体よりは、出来事自体からの感情と考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究では、幼児・児童期に経験したお菓子にまつわるエピソードについて、子どものお菓子のかかわりという面から、和菓子、洋菓子、スナック菓子、一口サイズ菓자에分けて検討した。主な結果は、次の通りである。幼児期のエピソードの場合には家族や保育園でのおやつに和菓子を食べた状況のエピソード、児童期の場合には友達とスナック菓子を食べたエピソードが印象に残っていることが示された。さらに、洋菓子については女性が多いことの結果も示された。また感情については、そこでは様々な感情が経験されたといえる。ポジティブ感情が多く見られるとともに、ネガティブな感情の出来事も見られた。ただ、これらについては現在とっては懐かしい出来事と振り返っているものの少ない。

これらの結果について、幼ない子どもにとってのお菓子の意義の面から検討する。冒頭部分でもお菓子にまつわる懐かしい思い出の例を紹介したが、一般に幼いころの出来事については記憶情報としては十分ではなく、曖昧で部分的で再構成された場合も少なくない。しかしながら、私たちは折に触れて幼い頃の思い出を振り返ることがあり、その意義は小さくないと考える(矢野 1988, 坪井 2017 など)。おそらく、私たちはみな幼い頃に経験したことを大切にしていると言える。問題の項で述べたお菓子ナビや森永製菓の菓子育など製菓業界の領域での知見とともに、今後はお菓子の種類ごとに検討した本研

究結果も踏まえながら子どもたちにとってのお菓子の意義・役割についてさらに検討していきたいと考えている。

また、お菓子の種類ごとに検討する必要性を示す1つの例として、坪井（2014）で検討したエピソード例を下記に挙げる。「飴をなめながら公園で遊んでいたら、喉につまらせて息が出来なかった、苦しくて死ぬかと思ったが、友だちに背中を叩いてもらって抜けたので大丈夫だった。」が挙げられ、その後「現代の子どもの食事法は知らないが、飴をのどに詰まらせて亡くなった子どももいると思うから、遊びながらお菓子を食べるのは止めた方がいいと伝えたい。」と、子どものお菓子への関わり方についての現在の考え方を述べている。この例では、「飴」ということが影響している。同じお菓子を食べるとしても、「飴をペロペロとなめる」「ガムをクチャクチャと噛む」「スナックをボリボリほおばる」とさまざまな出来事を経験することになる。このような点からもお菓子の種類の分類を整理しながら各お菓子の特徴を活かした検討を進めていきたいと考えている。

このように、本研究ではお菓子の種類ごとに検討したことが1つの特徴であるが、課題も残されている。まず、お菓子の種類分けについては今後系統立てて整理していく必要がある。問題の項でも述べたように、チョコの場合での洋菓子との区別などが難しい場合など、複数の種類の中間的なものあるいは重なっているものなどがみられる。現状のお菓子を整理していくことも難しいが、懐かしさも含めお菓子自体も時代とともに時々刻々と変化している。昔ながらの変わらないお菓子もあれば比較的新しく出現したお菓子もある。特に最近ではレトロ商品などもあり、現状も複雑である。

一方、自伝的記憶の観点からは、お菓子にまつわるそれぞれの経験が各人の自伝的記憶としてどのような形で保持され、後になって想起されるのだろうか、さらにはどのように懐かしさを感じ、お菓子に対する考えやかかわりを深めていくのだろうか、といったことがお菓子の自伝的記憶の意義にかかわる

問題となるであろう。

このように、人は、自伝的記憶に基づいた過去と現在の自分をつなげていながらお菓子に関するさまざまな経験を積み重ねていくことになるが、それらの経験がどのように活かされていくのか、お菓子の意義・役割から今後も検討を重ねていきたい。

5. 文献

- 平野恵理子（2010）. 和菓子の絵本 和菓子っておいしい あすなろ書房
- 飯塚由美（2014）. 「共食」と「一人食」における心理および行動パターンの分析Ⅰ テキストによる質的分析から 島根県立大学短期大学部研究紀要 52 21-25.
- 飯塚由美（2015）. 「共食」と「一人食」における心理および行動パターンの分析Ⅱ 食事評価とパーソナリティの観点から 島根県立大学短期大学部研究紀要 53 41-48.
- 松林千宏（2017）. 日本懐かしお菓子大全 辰巳出版
- 水野豊二・山内知子（2000）. 子どもと作って食べよう園でのおやつ 明治図書
- 森永製菓(株) ホームページ資料（2018）. 「森永製菓の菓子育」
http://www.morinaga.co.jp/food_education/
最終アクセス日時 2018, 3
- 根ヶ山光一・外山紀子・河原紀子（編）（2013）. 子どもと食—食育を超える— 東京大学出版会
- 岡本夏木（2005）. 幼児期 子どもは世界をどうつかむか 岩波新書
- 佐藤浩一（2008 a）. 自伝的記憶研究の方法と収束的妥当性 佐藤浩一・下島裕美・越智啓太（編）自伝的記憶の心理学 第1章 北大路書房
- 佐藤浩一（2008 b）. 自伝的記憶の機能 佐藤浩一・下島裕美・越智啓太（編）自伝的記憶の心理学 第5章 北大路書房
- 高橋雅延・佐藤浩一（2008）. 「自己と記憶」の特集にあたって 心理学評論 51 特集：自己と記憶 3-7.

- 瀧川真也・仲真紀子 (2011). 懐かしさ感情が自伝的記憶の想起に及ぼす影響：反応時間を指標として *認知心理学研究* 9 65-73.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 *心理学研究* 62 350-356.
- 坪井寿子 (2014). お菓子に関する自伝的記憶 — 感覚モダリティに関する検討 — *東京未来大学研究紀要* 7 125-134.
- 坪井寿子 (2015). お菓子の自伝的記憶に関する代表的な事例を用いた検討 *東京未来大学紀要* 8 83-91.
- 坪井寿子 (2016). お菓子の自伝的記憶における社会・文化的側面の検討 *未来の保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要—* 3 71-78.
- 坪井寿子 (2016). お菓子の自伝的記憶における対人的状況 —感情からの検討— *東京未来大学紀要* 9 127-136.
- Tsuboi, H. (2016 a). “The Autobiographical Memory on the Japanese Cheap Confectionery (“Dagashi”)” *31st International Congress of Psychology, Poster Session (Cognition) (Yokohama)*.
- Tsuboi, H. (2016 b). “The Interpersonal Situation in the Autobiographical Memory on Confectionery of Japan” *31st International Congress of Psychology, Poster Session (Cognition) (Yokohama)*.
- 坪井寿子 (2017). 記憶と子ども —過去と現在をつなぐ子どもと大人の記憶— *ミネルヴァ書房* 46-56.
- 矢野喜夫(1988). 幼い時代の記憶 岡本夏木(編著) 認識とことばの発達心理学 ミネルヴァ書房
- 全日本菓子協会 ホームページ資料 (2018). <https://www.okashi-navi.com/greeting/greeting.html>. 最終アクセス日時 2018, 3
- (つばい ひさこ) 東京未来大学